

連載 58 人の性向(性質)を表す方言 その1

本連載を始めて5回目の新年を迎えました。本年もご愛読いただければ幸いです。

昨年10月からは、平成8年から12年にかけて小松市立博物館の委託を受けて実施した小松市内の方言調査のうち、大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町での生活語彙調査で得られた方言をご紹介しますが、今月からは人の性向(性質)を表す方言を見ていきたいと思います。

方言の世界は悪態語が豊富

方言の世界には意外に悪態語が多いのです。「だから方言には汚いことばが多くて」と嘆く人がいるかもしれませんが、筆者はそうは思いません。人間ですから心底相手が憎くて悪態をつくこともあるでしょう。しかし、方言の世界に悪態語が多いのは、それが許される、温かで親密な人間関係が地域社会に成立しているからではないでしょうか。

人の性向(性質)を表すことばも、決して褒める言い方ばかりではありません。この世界にも悪態語が意外に多いものです。が今回はまず褒めることば的なものから取り上げることにします。

カタイ子、リクツナ子、ハバシー子、ハツメナ子、コーシャナ子、ハシカイ子ってどんな子？

金沢で初めて、「○○さんこの子はカタイ子や」というのを聞いて、カタイというのは、筆者の福井(武生)方言で言う「丈夫な・健康な」の意味か、共通語的に言う「真面目で堅い」の意味かと勘違いしたことを今でもよく覚えています。金沢や小松などでは、カタイ(カテとも)とは「素直で言うことをよく聞く。真面目でおとなしい」といった意味になります。リクツナもこれと似ていて、人の性質を言う場合、「物分りがよくておとなしい」といった意味になるようです。

子どもを褒めるのに、ハバシー子、ハツメナ子といった言い方も聞かれます。ハバシー、ハツメナは、カタイ、リクツナよ

りも頭のよさが強調されて、「利口な」の意味に近くなります。ハバシーは「幅広い」で、「羽振りが良い」の意味でも使われ、「人の目に立ちやすい」ことが「利口な」に近い意味を生んだに違いありません。ハツメナは「発明な」の字が当てられるものです。

コーシャナ子、ハシカイ子という言い方も聞きます。コーシャナは「巧者な」の字が当てられ、「利口な。甲斐性がある」に近い意味で使われますが、「要領がいい」という、ややマイナスの意味を含むこともあるようです。ハシカイもこれに似て、「知的に賢い」といった意味を表すと同時に、「ずる賢い」というマイナスの意味でも使われます。

タラなどと叱ってばかりいないで、褒めて子どもにやる気を出させる。そんな大人たちの気配りが、これらの多彩な褒めことばを生んだのかもしれない。皆さんはどう使い分けていらっしゃるでしょうか。

連載 59 人の性向(性質)を表す方言 その2

先月号では、性向語彙の中から、子どもを褒めることばの世界をのぞいてみました。今月は逆に、主に子どもへの悪い性向(性質)を表す方言から見ることになります。

性向語彙の悪態語は女性用が多い

子どもの悪い性向と言えば、すでに連載の本紙2001年2月号で「お転婆」の方言を取り上げたことがあります。かつて、女の子はおとなしくて控え目であるべきだと考えられていたころ(今でもそう思っている人は少なくないようですが)、男の子だったり元気でいいと褒められるのに、同じことをした女の子はバツチャメロと言われたりしました。バツチャメロとは、小松市内の広い範囲で聞かれる「お転婆」を表す方言形です。「罰や」+「女郎(女性への卑称)」からの変化形だろつと考えています。

ほかに、「男のよつな女の子」をオトコ

メロ、「乱暴な女の子」をテッカメロ、「やんちゃな女の子」をヤンチャメロなどといった言い方も聞かれます。「おしゃべりな人・女の子」のことをオチャベ(チャベとも)と言います。どうもこの種の言い方では、女性の方が損な役回りとなって、色々と言われることが多いようです。

また、「気の強い女の子」をキカンコ(言うことをきかない子)の意から)と言つことがあるようですが、男の子の場合にはキカンボーになります。

男の子と言えば、尾小屋でダッチャンボーという言い方を聞きました。ダッチャンとは「埒明かぬ」から変化したダチャカ(がさらにダッチャンと変化したもので、ダンチャンボーは「駄目な、出来の悪い男の子」といった意味です。女の子の場合は、ダッチャンネンネと言つたことでした。

テナワン大人の世界にも豊かな悪態語

子どもに限った言い方ではありませんが、人の性向の悪さを言う類の方言を今少し挙げてみます。

シヨーフル・シヨーノフルイは「性悪・性の悪い」の意で、「性格が悪い人、根性の曲がった人」のことを言います。似たことを言うのに、「性格が悪い」ことを言うドクシヨーナ(「毒性」か)、「意地悪」なことを言うコンジョフル、「気位が高くして傲慢な」ことを言うキダカイなどの言い方も聞かれました。

符津や安宅で聞いたテナワンは、「手に合わない」のテナワンがテナワン→テナワンと変化した形で、「手に負えない、乱暴な」といった意味です。福井県嶺北地方にも広く分布する言い方です。テナワンモンとなると「乱暴者」の意味となります。

今月はそろそろ字数が尽きました。性向の悪さを言う方言は、また来月に続けることにします。

ところで、昨年から小松郵便局のホームページに、「小松の方言」として本連載が転載されています。アドレスは、<http://www.hokuriku-yusei.go.jp/dpo/komatsu/hougen/hougen.htm> です。ぜひ一度ご覧くだらう。

連載 60

人の性向(性質)を表す方言 その3

さて方言が「田舎のことば」「汚いことば」「訛ったことば」といった言い方で、共通語・標準語に対して悪者にされていた時代は終わろうとしています。最近では石川県内でも方言見直しの動きがさまざまな形で見られるようになりました。本紙の記事の中にも方言が時々登場しますし、中でも市長さんの連載「コラム」で「くばらん」に登場する方言をいつも楽しみにしています。最近のニュースでは、小松の新しいファッション・ブランドに「mas36(んな・さんじゅつろくへんな)は「みんな残らず」の意の方言、36は小松市の位置北緯36度から」という名が付けられたと言います。また、昨年11月に某ローカルテレビ局で放送された「石川ふるさとCM大賞」でも、県内41市町村のうちの約四分の一にあたる11市町村が、何らかの形でCMの中に方言を登場させていて、これも歓迎すべき傾向だと感じました。本連載も、そのような県内の方言見直しのため

に少しでもお役に立てればと思っっています。

コスカン、コンジョヨシからポコイ、ダラまで

では今回も前号に続けて、小松で聞かれた人の性向の悪さを表す方言を見ていくことにしましょう。

「憎たらしい。ずるい」ことを言う「コスカン、コスカン」を符津で聞きました。符津では「ずるい人」をスカンタラシとも言っています。

性格が悪いというより、むしろ気がよすぎて逆に「お人好し」といったマイナス評価を伴って使われる言い方に「コンジョヨシ、コンジョヨシ」「根性良し」(ら)があります。安宅・符津・尾小屋で聞きました。これに似たのは福井県でも聞かれ、筆者の郷里(武生)では「コンジョシ」と言っていました。

「ジョンナヒト」とは「変わった人」のことです。ジョンナは本来「つまらない。面白くない。怪しい」といった形容語ですが、人の性向をさすと「怪しい」に近い意味になる

ようです。符津で聞きました。

尾小屋では、「わざと他人に逆らったりするような人」をさす「ヘンクツモン」、「我を張る。意地を張る」ことを言う「ゴーハル」、「頑固な人」をさす「イチガイモン」などを聞きました。イチガイナとは「徹な。強情な。偏屈な」といった意味の形容語です。

マセンコは「ませた子。大人びた子」、ケチンポーは「けちな人」、ヨクンポーは「欲張りな人」のことを言います。「欲張りな人」のことはヨクナヒトとも言います。いずれも安宅や符津で聞いたものです。ゴークは「強欲」からで、やはり「けち。欲張り」といった意味になります。尾小屋で聞きました。

安宅のボカス、符津のポコイは「馬鹿な。愚かな」に近い意味です。ほかに「馬鹿」を意味するものにはダラがあります。ダラは本来「知恵が足りない」の意の「足らず」が、タラス↓ダラス↓ダラと形を変えたものと考えられます。仏教用語の「陀羅尼經」「陀羅仏」の「陀羅」とは関係ありません。

連載 61

人の性向(性質)を表す方言 その4

1998年4月号から始めた本連載も、早いもので今月からいよいよ6年目に入ります。昨年10月号からは、大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町の5地点(集落)でお聞きした生活語彙の中からご紹介していますが、今月も人の性向(性質)を表す方言を続けます。先月、先々月は悪い性向を表す方言を取り上げてきましたが、今月は良い性向を表す方言を見ていくことにします。

メンコイは東北地方だけでなく北陸にも

龍助・符津では、容貌的なかわいさを含めた「かわいい」の意味でのメンコイが聞かれました。メンコイと言うと、上代語「愛し」が変化したものとして、東北地方で広く使われているのはよく知られているところですが、新潟や富山、そして小松を含めた石川の一部にも使われていることは意外でした。

「エチャケナ、子やなあ」(大杉・符津・安宅のエチャケナ(尾小屋・龍助ではエチャキナ、大杉・尾小屋ではエチャゲナとも)とは、「かわいい」「愛嬌がある」「無邪気な」といったプラスイメージの意味になります。主に女の子に対して使われることが多いようです。これに似たものに「愛嬌のある」「お茶目な」の意の、チャメナという言い方も聞きました(尾小屋)。オチャメ(お茶目)のオが落ちた形でしょう。

符津や安宅で聞いた、アイソラシーは「愛想がよい」ことをさし、アイソノエーも似た意味になります。また、尾小屋では「愛嬌をふりまく」の意のアイキョーマク(愛嬌(を)まく)を聞きました。「賑わしい」から変化したと思われる「ンガシ」は、文字通りの「賑やかな」ことをさすだけでなく、人の性質をさして「陽気な」「愉快な」といった意味で使われています。

小松のイサドイはいい意味のイサドイ

ところで、皆さんはイサドイ、という形容語を使いますか。使ったとしたら、どのよ

うな意味で使っているのでしょうか。尾小屋では「元気がよい」「勇ましい」といった、いい意味になるようです。実はイサドイは金沢でも使われるのですが、最近面白い現象が観察されます。金沢でも小松と同じように「元来は「立派だ」に近い、いい意味で使われていたが、その後「威張っている」といった意味も表すようになり、最近の若い人には「生意気な」に近い、悪い意味で使われるようになってきています。

言語変化の法則の一つに「敬意低減(通減)の法則」というのがあります。これは、ことばの丁寧さの度合いが、使っているうちに次第に下降していく傾向を言います。例えば、相手を呼ぶことばの「きさま(貴様)」「あなた(彼方)」「おまえ(御前)」は、長い間使われているうちに本来の高い敬意を失ってしまったものです。金沢でのイサドイの意味の変化は、全く同じではありませんが、意味の下降という点では、一部似た現象と考えることができます。

連載
62植物の方言あれこれ
その1

今年もまた新緑の美しい季節を迎えました。四季の移ろいの中でこそ感じるこののできる芽吹き喜びです。1月号から続けてきた「人の性向(性質)を表す方言」は前回でひとまず終わりとし、今月からは新緑の季節に因んで、小松市内での植物の方言を見ていこうとします。

本連載ではこれまでにも、植物の方言として「かぼちゃ(南瓜)」「露草(彼岸花)」「みぞそば」「桑の実」の方言を取り上げて、市内での方言分布を見たことがありますが、今回は、大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町の5地点(集落)で聞いた、それ以外の植物の方言をご紹介します。

「すみれ重」は子どもの遊び相手

玩具やゲームが氾濫している現在と違って、昔の子どもにとっては、野の植物は恰好の遊び相手でした。例えば、春に道端に咲く「すみれ」の花の首の部分を一っ

かけて友達と引き合いませんでしたか。そんな遊びをする花ということで、大杉・尾小屋では、スモトリバナ、スモトリバナの方言が聞かれました。筆者は「おおばこ(重前草)」の穂を使って引き合って遊んだこともあり。所により「おおばこ」にスモトリグサの名があるのはそのためです。「おおばこ」の方言は符津でオーバ(大葉の意)を聞きました。

「ぜんまい(蓨)」の綿でボールを作る

春の山菜を代表するものに、「ぜんまい」と「わらび(蕨)」があります。ともに方言として変わった言い方があるわけではありませんが、「ぜんまい」はジエンマイ、ジエンメーの発音が聞かれました。尾小屋では、食用のものをオンナジエンマイ、固くて食べられないものをオトコジエンマイ(符津では「へピンジエンマイ」と言って区別したと言います。筆者などは小さい頃、若い「ぜんまい」についている綿状のものをたくさん集めて丸く固め、糸で巻いてボールにして遊んだことをよく覚えています。その綿状のものを大杉ではワ

タポーシと呼んでいました。

「いたどり(虎杖)」は空腹時のおやつ

尾小屋では「いたどり」をスイカンボと言っていました。春、山に山菜取りに行ったときなど、お腹がすくと、昔の子は野に生えているいたどりを折り取って生のままおやつ代わりにかじったものです。その酸っぱさが何とも食欲をそそったものです。

子どものおやつと言えば、すでに連載42回(01年9月)で紹介した「桑の実」があります。小松の方言では、ツバメ、ツバミが代表的なものでしたが、甘く熟した「桑の実」を口の周りを青黒くして食べたことを懐かしく思い出される方もいるでしょう。

今回は、子どもにとって身近な植物の方言を取り上げてみました。こういう植物との思い出が作りにくい今の子どもたちには、ちょっとかわいそうです。

連載
63植物の方言あれこれ
その2

先月号から再び植物の方言を取り上げていますが、この時期は金沢市内でも店先で野菜の苗や種が売られているのをよく見かけます。しかし、そこで売られている野菜の名に方言名を見かけることはまずありません。

最近では野菜の名前の世界にも共通語化の波が押し寄せ、若い人たちが子どもたちから野菜の方言名を聞くことは難しくなっているように思います。野の草花の名前などと違って、野菜の場合にはマーケットの野菜売り場やさまざまな所で共通語名の情報があふれているためでしょう。

しかし、年輩の人たちの中には、今でも思わず「ポプラ、ナスビ、コンボなど、昔ながらの野菜の方言が口をついて出る方もいるのではないのでしょうか。今月はそんな野菜の方言を見てみましょう。

衰退に向かう野菜の方言

ポプラ、ナスビ、コンボは、それぞれ「かぼちゃ(南瓜)」「茄子」「牛蒡」をさす方言形です。ポプラを含む「かぼちゃ」の方言については、本連載99年3月号でご紹介したことがありますが、ポプラの類が中世末に伝わったポルトガル語起源と知って意外に思われた方もいたに違いありません。

「かぼちゃ」と同じ渡来作物と言えは、「唐辛子」や「玉蜀黍」があります。南蛮渡来ということ、小松でも「唐辛子(ピーマンも)」「ナンバ」「玉蜀黍」にナンバキビの方言が聞かれます。「玉蜀黍」には、ほかに「トキキ」「サトキ」も聞かれました。トキキは南の福井県嶺北地方から加賀地方に広く分布の見られるものです。

ナスビ、コンボも、本来「茄子」「牛蒡」の関西地方での古い呼び名で、小松に限らず、北陸地方をはじめ全国各地に使われています。「コンボは、野菜としての牛蒡の方言以外にも、「コンボホル(牛蒡を

掘る)」という慣用語の形で、東北の青森・岩手・秋田・宮城県では「しっこく文句を言う」「子どもがただをこねる」などの意味、岐阜県飛騨地方では「ものごとをしっこく穿鑿する」の意でも使われてきました。では、小松で聞かれる、それ以外の野菜の方言を列挙してみよう。

エモは大杉での芋の総称、イモノコ(芋の子。大杉でエモンコ、エガエモとも)は「里芋」のことです。「里芋」と言えは、里芋の株(親芋)をさすガシラ・カシラも聞かれました。「カツケイモ」は大杉で聞かれた「じゃが芋」の方言です。

また、「葱」のネブカ(根深)、落花生の「ソコメ(底豆)、ナンキンマメ(南京豆)、「大豆」のアジエマメ(畦豆)、「ミンマメ(味噌豆)、「キナコマメ(黄粉豆)、「空豆」のオタフクマメ(お多福豆)は、それぞれの野菜の特徴、形、それによって作られる製品などに注目した名であることがわかります。素朴な名付けの心理が垣間見える野菜の方言の世界です。

連載 64 植物の方言あれこれ その3

これをお読みいただく7月初めは、梅雨の雨に濡れて、植物の緑がひととき濃く見える頃でしょう。本紙先月号では、環境への小松市民の新しい挑戦が取り上げられていましたが、この豊かな緑を守り、次代に引き継ぐ責任が私たちにはあるのです。そして、本連載でご紹介している方言もまた、地域の豊かな言語環境を育ててきた大切なもの。方言が衰退に向かうのは一部にやむを得ない理由があるとしても、こつこつと時期だからこそ、自然環境だけでなく、言語環境を豊かにする方言の価値や役割を今一度見直したいものだと思います。

先々月は子どもに身近な植物、先月は野菜の方言を見ました。今月はそれら以外の植物の方言、そして植物にまつわる方言を見ることにします。

そのほかの植物の方言あれこれ

梅干し作りに欠かせない紫蘇はチソと

発音されます。この発音は北陸地方をはじめ、全国的にかなり広く聞かれるものです。コケが、苔よりも茸をさして用いられるのも、北陸全域に共通する特徴です。

田んぼの邪魔者、稗にはへーの発音、そして路にブーキ、柿にカーキ、梨にカーシ、藤にブーシ、蔓にツールの発音(傍線部を高く発音が聞かれました。ブーキからツールのように、2拍名詞の一部の語の1拍目が伸びて発音されるのは、クーツ(靴)、カーツ(夏)、アーシ(足)などと同様、旧能美郡域で聞かれる「能美郡ことば」の発音上の特色として知られています。

野生の山芋であるジネンジョの蔓にく実(むかご)にはゴンゴ、ゴンゴ、繁縷にはアサシラギ、アシヤシヤギ(アサシラギの音変化形)が聞かれました。山の谷川の脇に生える水路は、尾小屋でカタハ(金沢辺でもこう呼ぶ)、ヨイナと呼ばれますが、大杉ではタニタニが聞かれました。山の谷に生えるからタニタニなのでしょう。グンドは大杉で山葡萄、ビンバナは尾小屋で鳳仙花をさします。

モチグサは蓬のこと。蓬の新芽を摘んで草餅を作ることからこう呼ばれるようです。ドクダメは薬草の「どくだみ」のことです。「どくだみ」の葉を熟して柔らかくし、化膿した箇所塗ると膿を吸い出してくれるので、「毒溜め」の民間語源による名でしょう。「どくだみ」が化膿に効くのは、筆者も子どもの頃に体験済みです。ぜひ一度お試しください。

「植物が腐って悪臭がする」ことを、ネグソナル、ネンソナル、「植物が水気を失って弱る」ことを、シナビル、シオレルのように言います。「植物の実が熟す」とは、ミガイル、イロクル、イロツク、イロズク、イロムなど、色々な言い方が聞かれました。大杉のヨウダは「熟した」の意です。

以上、3か月にわたって植物の方言をご紹介してきました。来月からは、「季節・気候」に関する方言を取り上げる予定です。どうぞお楽しみに。

連載 65 季節・気候に関する方言 その1

今年もまた暑い夏がやってきました。北陸の夏は蒸し暑くてつらいとよく言われますが、東南アジアやアフリカなど、常夏の国から金沢大学にやってきた留学生の口からは、四季がはっきりしている日本が羨ましいといったことは聞くことが少なくありません。中でも、私たちの暮らす北陸地方は、太平洋側と違って冬には雪も降り、四季の移ろいをより強く感じることでできる地域と言えるでしょう。

今月からは、そんな「季節・気候」に関する小松の方言を見ていくことにします。

日本語は自然に関する語彙が豊富

著名な国語学者、金田一春彦氏は『日本語新版(上)』(岩波新書)の中で、「日本語には自然を表わす語彙が多い」というのが定評であるが、これは日本の自然が変化に富んでいること、もう一つ日本人が自然に親しみ、強い関心をもって来たこ

とを意味する。(1-61ページ)と書いています。とすれば、方言の世界でも自然現象、例えば「季節・気候」に関する語彙が多いと予想されます。

北陸の冬を象徴する雪の方言

ではまず、ヨーキ(天候、天気)の意に関する方言から見ていきましょう。

季節の中でも、北陸と言えばやはり冬。そして、冬と言えば雪です。雪のことはユキとしか言いませんが、雪の種類を言う方言には色々聞かれます。粉雪には「コンカユキ(コンカは玄米を精米するときに出る「糠」のこと)、ふわふわした大きな雪には、ボタユキ、ボタンユキ、そして冬の初めなどの水気が多い雪(「みぞれ」)には、ベタユキ、バタユキ、バタバタユキ、ミズユキ、アマケノユキなどの名が聞かれました。

雪に関する方言と言えば、拙稿「日本海側の雪のことば―北陸地方の雪にまつわることば―」(『日本語学』21-1、明治書院、2002年)では、『現代日本語方言大辞典6』(明治書院)の「雪」の項に載る

雪の種類名の数を各県(代表地点)地点のみごとに調べて表に示しました。すると、沖繩をはじめ四国や九州ではユキ一語のみという県が多いのに、北海道から東北の日本海側、北陸地方では雪の名前の数が多くなるのがわかりました。最も多いのが、青森(青森市)・長野(秋山郷)の15種類でした。

また、それとは別の資料ですが、天野義廣氏によれば、小松に近い福井県勝山市方言で、合わせて20種近い雪の名が報告されています。多雪地帯の生活が、多くの雪の名を必要としたに違いありません。

小松の方言に話を戻しましょう。冬の季節に関するものに「霰をさすアラネ」が聞かれます。市内でも雪の多い大杉町では、表層なだれをさすアワも聞かれました。アワ「テタ(表層なだれが起きた)のよう」に言うそうです。

今回はこれで紙幅が尽きました。次号に続けます。

連載
66季節・気候に関する方言
その2

雪の季節にはまだだいぶありますが、先月に続いて、冬の季節・気候に関する方言です。

市内全域(約110集落で行った言語地理学的調査の結果をもとに、本連載ではすでに、〈雪渡り〉(98年6月・2000年3月)、〈氷柱〉(同年1月)、〈雪に足がはまる〉(同年2月)、〈雪道に作る落し穴〉(2001年3月)の方言についてご紹介したことがあります。〈雪渡り〉ではソラルキ、オシヨラキ、ウワアルキなど、〈氷柱〉ではタルキ、タロキなど、〈雪に足がはまる〉ではウツル、ゴボルなど、〈雪道に作る落し穴〉ではウツリコ、オチンコなど、いずれも雪国ならではの多彩な方言形の分布を見ることができました。また北陸の冬の名物と言えは雪を呼ぶ雷。これも本紙99年10月号で紹介した〈雷〉の方言の中に、ユキフリガミ、ユキガミ、ユキガミナリがありました。詳しくは本紙バックナンバーをご覧ください。

大杉町・符津町の冬の季節・気候に関する方言

さて今月は、冬の季節・気候に関する方言を、市内でも雪の多い山間部の大杉町と、JR栗津駅に近い平野部の符津町を比較する形で見ていきたいと思えます。

寒さで濡れた手拭や雑巾などが凍ることを大杉ではシミル、符津ではカチカチ二ナルと言います。シミルと言えは符津では「氷がはるほどに冷える」の意となります。また、寒さのために手足などにできる霜焼け(凍傷)は大杉でシンバリ、符津でシンバレです。シンバリは怒らう、凍るくらいに冷える(シミル)と腫れてできるというシミバレが、シンバレ↓シンバリと変化したものです。寒さで凍えることを大杉でカンジル(寒じる)、符津でカジケル、カンシケルと言います。冬の前に吹く北風は符津でアイノカゼ、冬の雷は大杉がユキガミサマ、符津がユキガミナリ、雪掻きは符津でユキワリ、雪道を歩くときに履物につけた「かんじき」は大杉でカンズキです。

ところで、冬の生活(イ)と言えば、昔はどの家にもあった囲炉裏。暖をとるために家族が囲炉裏の周りに集まって話をする。そんな生活の中で、方言は上の世代から下の世代へと受け継がれていったに違いありません。その囲炉裏のことを大杉ではジロ、符津ではイリリと言いました。ジロは小松市内では大杉・丸山・花立といった山間部にしか聞かれませんが、鳥越村から白峰村にかけての白山麓(はくたけ)に分布する方言形で、小松では最も古い方言形だろうと考えています。

囲炉裏と言えは、その上に吊つてあった棚のことを大杉でヒヤマ(火天)の変化した形)と言ったようです。また、囲炉裏や火鉢の灰をすくう金属製の十能(じゆん)はセンバ、鍋・釜(かま)やかんをのせる三本の金属製の道具はサントク(三徳)から)です。では、次回も季節・気候に関する方言を続けます。

連載
67季節・気候に関する方言
その3

先月、先々月は、季節外れの冬の季節・気候に関する方言をご紹介しましたが、今月も季節や気候に関する方言を取り上げることにします。

風の名前の方言

風の名前を「風位名」などと呼ぶこともありますが、皆さんは風の名前を日頃どれくらい使っているでしょうか。一般的に、内陸部や山間部に比べて、海岸部(漁村)では風位名が多くなると言われます。漁業という職業が、それだけ風に深い関心を払わざるを得なかったことの証拠と言えるでしょう。

小松市内を代表する漁村である安宅町では、アイノカゼ(冬の前に吹く北、あるいは北東の風)、タバカゼ(沖からまっすぐに吹く強い北西の風)、ボンボカゼ(春にフェーン現象が起こったときなどに吹く強い南風。春一番のこと)、クダリカゼ(南風)、ミナミカゼ(春に吹く南風)、タ

カカゼ(海からの風)、ヒクカゼ(陸からの風)などの名前が聞かれました。

アイノカゼは、一般的には秋から冬にかけて吹く北からの風をさす場合が多く、北陸地方をはじめ、青森から山陰地方までの日本海側の広い範囲に分布し、冬の風を代表する名前として知られています。また、同じ北風の仲間のタバカゼは、『日本方言大辞典』(小学館)では「玉風の音変化形と解しています。北から吹く突風を、風の固まり(玉)に喩えた名でしょう。タバカゼは、北風系統の名として日本海側の青森、秋田、山形、新潟(佐渡)、石川、福井などに分布し、ほかに突風の名として奈良、和歌山、香川、愛媛、長崎などの西日本にも分布が見られます。

春の強い南風をさすボンボカゼは、安宅のほかにも大杉町でも聞かれました。同じ風のことを、尾小屋町ではボンボカゼ、符津町ではボンボラカゼとも言うようです。尾小屋では、「ボンボカカゼガフクト ユキ キエル(春一番が吹くと雪が消える)」と言ったことでした。クダリ(カゼ)は春から夏にかけて吹く南風で、

この名もまた青森、新潟、北陸、そして山陰の一部の広い範囲に分布しています。

タカカゼ(高風の意)、ヒクカゼ(低風の意)はいわゆる海風、陸風にあたるもので、単に海から吹く、陸から吹くという方向だけでなく、一日の中で言えば、タカカゼ(海風)が日中、ヒクカゼ(陸風)が夜というふうには、時間帯によって風向きが変わる場合にも言うようです。

風の関係では、安宅ではほかにタツマキ(竜巻)、オーカゼ(台風)も聞かれました。また、これも共通語的に広く通用していますが、海が風で荒れることをシケとも言っています。「ウミ シケテクッロー(海が荒れてくるぞ)」といった具合です。ほかに、大杉・尾小屋では、アラシ(大杉では夏に吹く涼しい風、尾小屋では雨まじりの台風)も聞きました。

今回は風の名前で紙幅が尽きてしまいました。次回もさらに季節・気候に関する方言を続けます。

連載 68

季節・気候に関する方言 その4

今年も早いもので残すところあと二月。旧暦霜月の名のとおり、晩秋の冷え込みが厳しい季節になりました。しかし、そんな寒い季節でも、方言の話題はなぜか地域に暮らす人の心をなごませ、暖かくしてくれるものです。今回も引き続き、小松の季節・気候に関する方言を見ていくことにします。

敬意を込めてヒーサマ、ホッサマ

私たち太陽系の人類にとって命の源の太陽。そんな太陽のことを、敬意を込めてヒーサマ、オヒーサマ、オヒサン、オヒーサンのように言います。日が昇り、日が沈むことも、「オヒーサン デサツシャッタ(お日様がお出になった)」「ヒーサマ シズマツシャル(お日様がお沈みになる)」「オヒサン エカツシャッタ(お日様がいらっしやった)」。お沈みになった(「)のように表現しています。太陽への素朴な畏敬の念が「デサツシャッタ」「シズマツシャル」「エ

カツシャッタ」の敬語助動詞「(サ)ツシャ」に込められているようです。

太陽(お日様)だけでなく、大杉町では夜の星も、ホッサマと「(様)つけで呼ぶ、「ホッサマ ナガレテ」(お星様が流れていっつしや)のように敬意を込めた「(テ)「ザル」が使われたりします。

太陽の光、月の光をオテラン(お照らし)から)と言います。例えば、「ヒーサマノ オテラン(お日様の光)」といった具合です。オテランはまた、「ガンコナ オテラシヤ(強い日照りだ)」のようにも使われています。大杉町では、長期間雨が降らない日照り(カ)ンカン「デリと言うことでした。カンカンとは日差しが強いことを表す擬態語です。

太陽が出れば好天なわけですが、そんな良い天気を大杉町では「テンポナン マイヒヤツタンナ(すごくいい天気だったね)」のように「マイヒ」と表現します。「(ま)い(真合の)日」というわけですね。

日照り雨はキツネノヨメドリのせう?

青空が見えるのに降る「日照り雨」の

ことをキツネノヨメドリと言っています。『日本方言大辞典』『小学館』によれば、青森県南部や富山県砺波地方でも「日照り雨」のことをキツネノヨメトリ(狐の嫁取り)と言っようです。似た言い方のキツネノヨメイリ(狐の嫁入り)という形は、静岡・岐阜・三重・兵庫・島根・広島・香川・高知などの広い範囲に分布することがわかります。

雨に関する方言と言えば、しとしと降る雨をさすシブシブアメ、夕立のことを言うヨダチも聞かれましたし、ひどい雨を大杉町でガンコナアメ、大雨を符津町でガチャブリとも言っようです。

ところで、田植え後の5月半ばの雨は苗の成長を助ける貴重な雨。「キョーノアメフ エー コヤシヤデ(今日の雨はいい肥料だよ)」というわけで、大杉町では「コヤシノアメ」とも言っようです。

連載 69

感情を表現する方言 その1

感情表現は共通語には置き換えにくい

昨今の方言見直しの機運は、一般の方たちにも方言の価値が正当に評価され始めたことを示すものだと思います。筆者は、方言の「現代的価値」とは、①地域の大切な文化、②生活のことは、③安らぎ・癒(い)しのことは、④ウチのことは、⑤郷土への帰属意識を確認するもの、⑥言語的アイデンティティの拠(よ)り所、⑦共通語には置き換えられない・置き換えにくいことば、⑧多様な日本語の二つの選択肢、⑨個性の象徴、といったものがあると考えています。が、今回から取り上げる感情を表現する方言の中には、⑦の「共通語には置き換えられない・置き換えにくい」ことばが多いように思います。従って、この類には、比較的若い世代にまで方言が使われ続けているものも少なくないようです。

ケナルイは古語「異なり」から

小松で「羨ましい」に近い意味で使われるケナルイ。ケナルイは古語「異なり」に由来する方言形で、もともとは「普通と変わっている様子。特別すぐれている様子」を表していました。が、「普通と変わっている、特別すぐれているから」「羨ましい」の意味に変化したもので、それが京都から周囲に広がったものです。小松だけでなく、北は東北の宮城・秋田をはじめ、北陸中部、近畿、中国、四国の広い範囲に分布します。「羨ましが」ることをケナルガルとも言います。

ハゲって「はげ(禿)頭」のハゲ

何か悔しいこと、嫌なことがあったときに思わず「アー ハゲ」ということばが口をついて出ることがないでしょうか。ハゲということばを聞くと「はげ(禿)頭」のことかと勘違いする人もいそうですが、これは今なお共通語としても使われるハガイイ(「齒痒い」)がハガイ、そしてハゲと音声変化した形です。小松で

も大杉町などハガイと言っ地域も見られます。金沢辺では、同じ「齒痒い」に由来するハガイシーの形も聞かれます。

イトツシャ、エトツシャは「愛し」や「か」

符津町などで聞いたイトツシャ、大杉町・安宅町などで聞いたエトツシャはともに、相手の悲しい出来事に対して、「かわいそうな」「気の毒な」といった感情を表現する方言形です。これらは、形容詞「愛し」「+断定の助動詞「や」の形から変化したものです。「かわいそうな」「気の毒な」の意の「愛しい」は、中世末期や江戸前期の文献例も見られますし、現代方言としても東北の宮城・山形のほか、北陸三県、中国・四国の一部などに分布します。「愛し」と言えば、市内東部や南部で聞くお礼のことば「イトシゲ」も相手の心遣いを思いやる優しい感謝のことばです。北陸三県で広く使われる感謝のことば「キノドクナ」(「気の毒な」に通じる心です)。

連載 70

感情を表現する方言 その2

新しい年を迎え、本連載も早いもので今月号で70回、足かけ7年目に入ります。本年もぜひご愛読ください。今月も先月に続いて、小松での感情を表現する方言について見ていくことにしましょう。

怒りの感情はシャモメル、セーモム

安宅町で聞いた感情を表す方言にシャモメルがあります。「怒る」「腹が立つ」にあたる意味ですが、怒りの程度が強いのがシャモメル(動詞・下二段活用)で、弱いのがセーモム(動詞・五段活用)との説明が聞かれました。シャモメルは大杉町でも聞かれましたし、セーモム(シエーモムとも)は大杉町、尾小屋町、符津町でも聞かれました。恐らく、セーモムは市内の広い範囲で使われるものでしょう。シャモメルは「精がもめる」(シエア モメルからシャモメルに変化)、セーモムは「精もむ」に由来する形で、本来は似た意味だった

ものが、両形が併存した安宅町などでは、怒りの程度に差をつけることで意味の棲み分けをしようとしたものでしょう。意味の合理化の意識が働いた結果です。

ところで、セーモムには「いらいらする」に近い意味を表す場合もあるようですが、ほかに「いらいらしたり、焦ったりする」感情を表現するイリイリスルという言い方も大杉町や尾小屋町で聞かれました。

イジクラシーはウザッタイとは違う

最近では、東京発信型の新方言ウザッタイ(ウザイとも)が若い世代を中心に全国的に分布を広げていますが、北陸の石川・富山両県ではあまり使われていません。理由は、似た意味で使われる形容詞のイジクラシー(若い世代では金沢市を中心にそれからの音変化形イジツカシーも)が、今も根強く使われているからです。石川・富山両県の人に、「イジクラシーはイジクラシーでウザッタイやウザイとは違う」、そんな気持ちがあるからに違いありません。「煩しい」「鬱陶しい」に近い感情

を表す方言です。

ヘシナイ、ヘシネーは「待ち遠しい」に近い意味

「待ち遠しい」「待ち遠しくて(退屈だ)」といった感情を表す方言の形容詞に、ヘシナイ、ヘシネーがあります。大杉町・尾小屋町などで聞きました。大杉では、「マツトツタラ ヘシナイ」(待っていたら待ち遠しい)のような言い方をしていました。これも石川・富山両県の範囲で使われる方言です。

ムサイは小松では「心配だ」の意味

ムサイという形容詞は、全国で多様な意味で用いられていますが、小松市を含む旧能美郡域では「心配だ」といった気持ちを表すようです。「ムソーテ ムソーテ オレン」(心配で心配でいられない)は符津町で聞いた用例です。



「この子はなかなか芸達者でね、家中がクツツリリスル」
で楽しませてくれるわいね。」
ひ孫の白方陽彩ちゃん(1歳6か月)と遊ぶ常田竹野さん(月津町)。

連載 71

感情を表現する方言 その3

先月、先々に続いて今月も感情を表現する方言について見ていきます。クツツリリスルは「満足する」

安宅町で聞いた方言に、クツツリリスルとこのがあります。「満足する」という意味です。クツツリリスルのように発音されることもあるようです。クツツリ、クツツリという擬態語が何を表したものはよくわかりませんが、満足した感じのよく伝わる面白い言い方だと思います。

ヨダンボシルは「油断する」

これも安宅町で聞いたものですが、「油断

断すること」をヨダンボシルと言います。例えば、「ヨダンボシトツテ オクレタ」(油断をしていて遅れた)のように言うようです。ユダンオシル(油断をする)のユダンオがヨダンボと発音を変えたものかも知れません。ヨダンボシルの反対はヨージンシル(用心する)です。

アイソムネーは「さみしい」

アイソムネーはアイソモナイ(愛想もない)が、アイソモナイ↓アイソモネー↓アイソムネーと音変化したものです。小松の方言としては共通語の「愛想もない」ことは意味が異なり、「さみしい」の意味になります。もちろん感情的に「さみしい」ことも表しますし、飾り付けなどが「さみしい」といった状態を表す場合にも使われます。

アセクラシーとは「落ち着かず焦る」感情

アシエクラシーとも発音されますが、セワシナイ、シエワシナイに似て、「落ち着かず焦る」気持ちを表す方言です。また、

「急ぐ」ことをシエクと言いますが、これは「急ぐ」からです。「シエーテ イク」(急いで行く)、「シエカント ポチポチ イラッシ」(急がないでゆっくりいらっしゃい)のように言います。

小松の高年齢層方言では、北陸方言の特徴として共通語の「せせ」にあたる音がシエ・シエとなりますので、「急ぐ」がシエクと発音されます。アシエクラシー、シエワシナイのシエも同じです。感情を表現する方言の類で発音が変わったものとしては、先に挙げたアイソムネー(↑アイソモナイ)、「もつたいない」の意のモツテネー(↑モツタイネー)、「面白くない」の意のオモシネー(↑オモシロネー)、「うれしい」の意のウレシッシャ(↑ウレシヤ)、「面白い」の意のオモシーなどもあります。

ほかに「愛想がつかない」の意のアクレル、「楽しみに」の意のオモイデナ、「気に入らない、嫌いな」の「ノスカン」などの方言も聞かれました。

以上で感情を表現する方言は終りにします。次回からは行動に関する方言をご紹介します予定で。